
夜明けの魔術師

toto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの魔術師

【Nコード】

N91530

【作者名】

toto

【あらすじ】

はじまりは一通の手紙だった。

幼馴染の魔術師アキサリスに便乗して、一緒に王都を目指す村娘リン。けれどその道のりはどうも厳しい。

RPG的なノリのファンタジーになりつつあります。

手紙

春風が運んでくる、ここちよい花の香り。

あつたかなおひさまとぽかぽか陽気。

ことりたちのさえずり、草木をゆらす風のおと。

平和だなあ。平和すぎて、あくびがでちゃう。

つい、うとうとってしそうになる体をひきしめて、わたしはうつ

そうと茂る緑の中へ足を踏み入れる。

おおきな森だった。

じつさいにどれくらいおおきいかは、じつはよく分かってない。

でも、とてつもなく広いつてことは実感できていた。だって、歩いても歩いてみずーつと緑が途切れないのだ。

すごく昔に、中央の国からおおきな軍隊がやってきて、この森の広さを調べたことがあったらしいけど。一昼夜あけたあとに全員、森の入り口に戻ってきたらしい。誰も、森の向こう側をみないまま、ずっと北にむかってまっすぐ進んでいたはずなのに、もとの場所に帰ってきてしまうなんておかしな話だつてみんな首を傾げた。そのときのえらい学者さんはいった。うつそうとした森に惑わされて、方向感覚が狂ってしまったんだろうって。

でも、不思議と、この森の向こう側をみたひとがいた話はだれも聞かない。

いつからか、この森には終わりが無い、はてがないってささやかれるようになった。

だから、ここは、はてなしの森って呼ばれている。

べつに害があつたりするわけじゃないし、むしろめぐみのほうが多いけど、立ち入るひとは少なかった。やっぱり、気味悪いんだろ
うな。

「アキちゃん。アキちゃん、どこー？」

そんなところに、好き好んで毎日のように足をはこぶひとがいる。
わたしの幼馴染のアキサリス。アキちゃんだ。

森に行くをたいてい、アキちゃんはお昼時になっても戻ってこない。だから、アキちゃんのお母さんに頼まれてわたしが迎えに行くはめになる。

別に森に入ることに対して抵抗はないし、むしろ、ちょっとおちつくし好きな雰囲気だなあとは思うけど、アキちゃんを探しにいくとわたしのお昼ごはんの時間が遅れる。そのことだけが不満だった。いちどアキちゃんにそう訴えると、鼻で笑われた。かわいくない。

「アキちゃん、ごはんだよー。おなかすいたよー。飢え死にしちゃうよー」

ぐうって空腹を訴えるおなかをさすって慰めながら、けなげにアキちゃんを探す。そうしていると、どこからかがさがさって音がして、アキちゃんが現れた。もつと早く出てきてくれればいいのに。

「せっかく出てきてやったのに。なんだよ、ぶっさいくな顔しやがって」

相変わらず、愛想のない態度だ。ただでさえ目つきが悪くて怖い顔なのに、薄氷のような目に剣呑な光が宿るとさらに凶悪になる。

それでも、ぼさぼさの枯れ草色の髪をもうちよつと整えてくれたら、チンプラみたいな見た目も少しはマシになると思っただけだな。

「ぶさいくっていった！ひどい！」

「腹すいたくらいでぶーたれてるおまえが悪い」

ぶくーって膨らませていたわたしの両頬を、アキちゃんは容赦なく手のひらでつぶした。痛い。おっきい手に挟まれたまま、くいつと上を向かせられるとアキちゃんの鋭い目がすぐ近くにあった。

「おなかすいた！」

「うるせー。耳元でキンキンわめくなよ。おら、帰るぞ」

アキちゃんは口の中でちいさく言葉をつぶやいた。そのまま、おでことおでこをくつつけて、そこからわたしがぜんぶ、アキちゃんとおなじものになってしまったような奇妙な一体感。浮遊感。

その一瞬後、わたしたちはアキちゃんの家裏手にある草原に降り立っていた。

これ、魔法つていうらしい。こんな風に、一瞬で場所を移動することができるなんて、つくづく便利だ。

わたしも使ってみたけれど、残念ながら、まったく才能がなかった。アキちゃんはお父さんが魔法使いで、才能もあるし環境もいい。凡人のわたしにとっては、なんだかうらやましい話だった。

「こんな手段もってるんだから、ぱぱっと時間どおりに帰ってきてよ。そしたらおばさんだってわざわざわたしを迎えにやろうなんて思わないよ。わたしはおなかすかないし、アキちゃんも邪魔がはいらないし、みんなしあわせだよ！」

「……。あそこにいると時間が分からなくなるんだよ」

「ふーん。そっかー。アキちゃんにも私の正確な腹時計を分けてあげたいなあ。便利だよ」

「いらねー」

アキちゃんはわたしをおしのけると、さっさと家に向かって歩き出した。

昔はもうちょっとかわいかったのになあ。いつからかすっかり無愛想な男の子になっちゃって、わたしは寂しい。

ゆううつになりかけていたわたしの鼻腔に、なんともいえない芳しい香りがすべりこんできた。ごはんだ。アキちゃんの家のごはんは、とびつきりおいしい。アキちゃんを迎えにいったあとは、ここでおひるをご馳走になるのがわたしの幸せな日課だった。

「おばさん！今日のおひるはなーに？」

アキちゃんのうしろを追いかけて、家に飛び込めば、白いエプロンをつけたアキちゃんのお母さんができたてのスープをテーブルに並べているところだった。

アキちゃんのお母さんとはとってもかわいい。

今日はアキちゃんと同じ枯れ草色の髪を後ろで束ねて、水色のワンピースの上から紺色のガウンを羽織るといいう上品な村娘風の格好

をしていた。こぼれおちそうなくらいおおきな藍色の瞳を細めて、微笑まれると、胸がきゅんっとしてしまう。

「いつもお迎えありがとうね、リンちゃん。助かるわ。今日はね、なんと！鶏肉とおやさいたっぷりのポトフと焼きたてのふんわりパンよ」

「わーい！いったきまーす！」

アキちゃんの隣に遠慮なく座って、ポトフとパンをほおばる。おいしい！

「生きててよかったあ〜って思える瞬間だー」

「おまえはお手軽でいいな」

このときばかりは、アキちゃんの嫌味なんてぜんぜん気にならない。やつぱり、おいしいごはんってすごく偉大だ。

「はい。リンちゃん、牛乳も飲んでね。アキもちゃんと飲むのよ」

「そうだよー。じゃないと、背、おつきくならないんだよ」

気を悪くしたように、アキちゃんはふいつと横をむいてしまった。背がちよつと低いことがアキちゃんの悩みの種らしい。乱暴でえらそうな態度のくせに、悩みが小さいなあ。

アキちゃんのこつという弱みをいじるのも、わたしの楽しい日課だった。アキちゃんよりチビなわたしがいつてもたいして堪えないだろうけど。

「……誰かくるな」

「んえ？」

アキちゃんは食事を中断して、玄関にむかった。玄関といっても、小さな家なので、食事をする居間と外は直接つながっている。

だから、ひよいつと身体を傾ければすぐに外の様子は伺えた。

アキちゃんは訪問者と二、三言かわすとすぐに扉を閉じた。その手には上等そうな白い封筒に、仰々しい赤い蠟印がしてある。このあたりではまず使わなさそうなものだ。

「手紙屋さん？めずらしーね」

「ああ。おやじ宛で、急ぎの用件らしい。おふくろ、おやじどこに

いるんだっけ」

おばさんは家の外をまっすぐに指差した。

「外の書齋に引きこもってるわよ。届けてあげて」

「わかった」

そう応えて、アキちゃんは出て行った。

なんだか、家の中の空気が重い。気のせいだろうか。

こころなしか、おばさんは怒っているようだった。じつとわたしが見つめていると、いつもどおりの笑顔を浮かべてくれたけど、なんだか不安だ。

「わたし、帰ったほうがいい？」

「ううん。いてくれたほうが、いいかもしれないわね」

おばさんのその言葉は、いっそうわたしを不安にさせた。

なにか悪い報せなんだろうか。

おばさんは、なにか心当たりでもあるのだろうか。

アキちゃんが、アキちゃんのおとうさんを連れて戻ってくるまでわたしは気が気じゃなかった。

あ。もちろん、ポトフは残さず食べたけど。

楽園への招待

「王都つてとおいんだねえ」

「馬車でいけば、四〇五日つてところだな。村から乗合馬車の駅まで丸一日かかる」

「そっかあ。なんだか旅行みたいでわくわくするねえ」

「……。おまえは気楽でうらやましいよ」

アキちゃんのお父さんの元に送られた手紙は、なんと、王都に住むえらいひとからの招待の手紙だったらしい。おじさんつて、無口で静かだから、なにをやってるのか、なにを考えてるのかよく分からないなぞのひとだったんだけど、王都ではとっても有名な人なんだつて。

偏屈者でも有名だから、実力があってもこんな風に召集されることは滅多にないんだつておばさんが言っていた。つまり、それだけ切迫したなにかがとおい王都では起こってるんだらう。

けど、詳細なことはなにも書いてなかったらしい。

おじさんは手紙に一度目を通してから、静かに言った。

「アキサリス、ぼくの代わりに行ってくれるね」

頼みごとでも、ましてやお願いででもない。おじさんの中の決定事項だ。アキちゃんはいやあーな顔をしたけど、しぶしぶといった感じで了承した。

おばさんはなにも言わなかった。黙つて、アキちゃんの荷造りの世話を焼いていた。

旅装束に身を包んだアキちゃんは、さながら、夜盗のようだった。暗がりであつたら、ぜつたい悲鳴をあげてしまう感じだ。黒で統一された長袖と下ばき、羊の皮で作られたブーツにそろいの手袋。土色の麻布のマントを頭からすっぽりとかぶる形で身体にまきつけている。うん、近づきたくない。目、怖いし。

簡素な服装の中で、目をひくのは赤い首飾りだった。こどものこ

るにも首からさげているのをみたことがあるけど、ずっとつけていたのかな。赤くて丸い宝石を銀の鎖で通したシンプルな首飾り。お守りみたいなものなのかもしれない。

一方、わたしといえば。

紺色のフードつきの膝元まであるローブを着て、さらに上から同じ色のマントをまとうている。動きやすいように作業用のズボンをはいて、金属ちつくなあまり綺麗な色じゃない髪の毛は、うしろで束ねるだけにした。いちおう、旅だから、あまりかわいい格好はしていない。

「ところでさ、おまえ、疑問におもわねーの？」

「なにを？」

「王都に呼ばれたのはおやじ。でも、おやじは今、手が離せない用事があるから代理で俺が王都に向かうことになった。ここまではいいな」

「うん」

「で、なんでおまえもついてくることになってるのかってことだ」

そう。アキちゃんの王都への旅路に、なんと、わたしも同行することになったのだ。

「おばさんが、アキちゃんをひとりで王都に向かわせるのは不安だからだつて言ってたよ！いわば、わたしは、アキちゃんの保護者になるのです」

「それでおまえは納得できるのか……そうか……」

アキちゃんは、複雑そうな顔でわたしをみつめた。言葉を飲み込んだつもりだろうけど、アキちゃんの目は雄弁に語ってくる。裏があるに決まってるだろうが、なんでもっと考えようとしななんだ、と。

わたしだつて、疑問に思わなかったわけではない。でも、わたしはアキちゃんのお母さんとお父さんを信用している。

両親のいないわたしを、娘のようにかわいがってくれたひとたちだ。そんなひとたちを疑うなんてできなかった。それに、アキちゃ

んをひとりで王都に送り出すのはやっぱり、わたし自身も心配だったのだ。……なんていうと、ぜったいアキちゃんはあきれられるだろうけど。

「なによ。その、可愛いソーな子をみるような目は」

「いや、俺がすっかりしらないといけないと、改めて再認識していただけだ。……はあ」

「ため息！わたし、アキちゃんと王都まで旅行できるの楽しみにしてるのに」

「そんな気軽じゃねえんだよ。こっちは。せいぜいおとなしくして、足をひっぱるような真似はしてくるなよ」

そう言われて、わたしはもちろん！とない胸をはって言った。

だって、村をおりて、山ろくの乗合馬車の駅までいったら、あとはずーっと馬車旅なのだ。

なにも考える必要はない。がたがた揺られているだけで、自動的に王都につくのだから。

だというのに。

わたしは、さっそく足をひっぱっていた。

「くらいよー。さむいよー。アキちゃん、どこー？」

日はすっかりおちて、あたりは冷え込んでいた。これが大地の上ならまだよかったのだけど、石畳はひんやりとした冷気を反射するだけでわたしをあったかく包んではくれない。石造りの箱の中で、ゆいいつ外へと続く扉は鉄格子に覆われて、引いても押してもびくともしない。

閉じ込められたのだ。

ふもとの村を目指して、早朝、ふたりで故郷の村を離れて山をおりはじめたところまではよかった。

太陽が真上にほどなく到達するころあいになって、わたしの腹の虫がないた。こらえ性のないわたしはアキちゃんにごはんをねだった。渡されたのは乾パンだった。当然、わたしは抗議した。そこからは喧嘩だ。旅立ってわずか数時間、わたしたちは喧嘩別れした。

ふもとの村に続く道は、ふたとおりあった。獣道と正規の道。悠悠自適に整備された道をおりるアキちゃんに、あっかんべーっと舌をだして、わたしは獣道を駆け下りた。

おもえば、それが間違いだっただ。

気がつくとき迷っていた。あるようでない、ないようである道を素人が渡るなんて無理があっただ。思わず、アキちゃんの名前を呼びそうになったけど、我慢した。

とりあえず、下へ下へと降りていけば、ふもとにたどり着くだろう。不安を押し込めてそう結論付けると、わたしはとにかく足を動かした。

「うえ？」

なんの脈絡もなく、首筋に衝撃がはしった。そして、暗転。今に至る。

ほんと、ここ、どこだろう。村の近くの山の様子はある程度把握しているつもりだったが、こんな石造りの人工物があるなんてしなかった。

冷え冷えとした空気に、ぶるりと身が震える。マントを前でかき合わせて、鉄格子に近づいてみる。

「すみませーん。だれかいませんかー？」

返事はない。しんとした暗闇がただ広がっていた。

いま、何時くらいかなあ。わたしの腹時計は、ぺこぺこすぎて機能していない。

アキちゃん、もうとつくにふもとの村についたかな。ひとりで、王都に向かう馬車に乗ってしまったのかな。もう会えないのかなあ。ひとりで閉じ込められていると、いやなほうへいやなほうへ思考がむく。

とりあえず、いまはなんとかしてここから脱出しないと。じっとしていても、事態がいい方向にむくとは思えなかった。

「でも、どうしよう」

わたしは、アキちゃんみたいに魔法が使えない。それに、とくべ

つ力があるというわけでもない。もし、魔法が使えたら一瞬でこんなところから抜け出せるし、力があれば鉄格子をやぶって逃げることもできる。

結局、こうして手をこまねくことしかできないのだと、痛感させられた。

才能ないからっていつて、おじさんの魔法のてほどきから逃げなかつたらよかつたな。力がないからっていつて、おばさんの護身術の教えを断らなければよかつたな。アキちゃんと、あんなことで喧嘩なんてしなきゃよかつたな。

なんだか、どうしようもない後悔ばかりが押し寄せてきた。

そのとき、ゆらりと空気が揺れた。煌々とした赤い光に闇が退けられる。同時に、かつん、かつんと闇を割るように、静かな足音が聞こえてきた。

凶暴な光に姿を暴かれて、わたしは目をつむった。がちやがちやと鉄格子の鍵をあける音がする。誰だろう。怖い。身をすくめて、わたしはしゃがみこんだ。

触れたのは、おおきな男の人の手だった。無遠慮な手つきでわたしの腕をとると、無理やり立たせる。足にうまく力がはいらなかつた。ちらつと男の人の顔をうかがおうとしたけれど、男の人は顔中に包帯をまいていて、見えるのはどろりとした不気味な目だけだった。

「歩け」

少ししゃがれた声。誰なんだろう。誰なんだろう。ぜんぜん知らないひとだ。

男の人に導かれるまま、わたしは歩いた。細い石造りの通路だった。けっこうな距離を歩いたように思う。それとも、恐怖のあまり感覚がおかしくなっていたのかもしれない。

やがて、わたしの目の前に木で作られた扉が立ちはだかった。

うしろを振り返ると、男の人が顎で入れと促した。

扉のとつてに手をかける。なんとなく、あけたくないなと思った。

開けたら、もう二度と光を拝むことができなくなる気がした。

ぐずぐずとするわたしに業を煮やしてか、いきなり男の人がそばにあった金属製のバケツをおもいきり蹴った。乱暴な音に心臓が縮んで、男の人から逃げるように、わたしは扉を開けて中に滑り込んだ。

目の前に広がる光景が、信じられなかった。

無数のランタンが壁にかけられていた。部屋の広さはアキちゃんの家の間くらいで、そんなに広くはない。石造りの腰掛が全部で三つおいてあった。その腰掛のうちのふたつに、ふたりの少女が並んで座っている。

どちらもみたことのない少女だった。年のころは、わたしと同じくらい。本来は、いきいきとした瑞々しい輝きを放っているであろう肌も、瞳も、なにもかもすべてが濁っていた。

彼女たちの足元からまるく円を描くように広がる染みの色。まるで絵の具をぶちまけたような無造作さ。ランタンのあたたかい光に照らされて、異様な光景が広がっていた。

「なに、ここ」

ずっしりと胃のあたりが重くなって、ほとんどなにも食べてないのに吐きそうになった。うしろで、かちやりと音がした。わたしをここまで連れてきた男の人が、扉に鍵をかけたのだろう。

へたりこむわたしを、男の人が無理やり立たせる。そして、最後のパーツをはめるように、わたしを石造りの腰掛の上に座らせた。

「いい夜だ」

頷けるわけがない。

「これで、世界は変わる。偽物は消えて、本物が残る。果たしてどちらが真実なのか、君に見せられないのが残念だ」

流暢にしゃべって、男の人は、真新しいナイフでわたしの頬をすうつとなでた。ぴりりと肌を裂く音がしたのに、痛みはなかった。全身が麻痺したかのように、動けない。

わたし、殺されちゃうんだ。

じわりと恐怖がめじりから零れ落ちる。男の人は、まるで恋人をいつくしむかのように、優しい手つきでそれをぬぐってくれた。加虐者と被虐者の奇妙なバランスは、まるでこの男の人に愛されているのではないかという錯覚をわたしに与える。そんなのまやかしなの。に。

「ばいばい」

ぎらりと、ナイフが凶暴な光を宿した。

目を瞑ることも、身体をよじって逃げ出すこともできずに、わたしはただその切っ先をばかみたいに見つめていた。

風が吹いた。

どこにも、風が吹き込むような場所があるとは思えない小部屋の中で、とつぜん、風が巻き起こった。

次の瞬間、ふわりと土色のマントが私の目の前に広がった。

信じられない。アキちゃんだった。

アキちゃんは俊敏な動きで男の人のナイフを蹴り落とすと、わたしを荷物みたいに抱えて後ろに下がった。小さな部屋だから、あまり距離がとれるとは思えない。

男の人は動揺したようだったが、すぐに気を持ち直したようだった。腰からもう一本ナイフを引き抜くと、真正面から対峙する。

「魔術師か。なぜ邪魔をする。もうすぐ、世界の真理がおとずれるというのに」

なめまわすように、男の人はアキちゃんを見据えた。そして、彼のどろりとした感情のない瞳に、はじめて、喜色が浮かんだ。

「その石は……はは、そうか。真実はそこにあつたのか」

アキちゃんは顔をしかめてつぶやいた。地面におろしたわたしの手を握る手はわずかに震えていた。

「なにいつてんだ、このおっさん」

「し、しらない」

アキちゃんの手をぎゅっと握り返して、わたしは泣きそうになりながら答えた。だって、本当にわからないのだ。この男の人はいつ

たいなんなんだろう。急に流暢に話し出したり、簡単に殺そうとしたり、喜んだり、わけがわからない。

ただひとつ分かるのは。きつと、わたし、この男の人とは一生分り合えないってことだけだ。

男の人は、ゆっくりとわたしたちをにじりよってくる。アキちゃんとなたしがいるのは、この部屋の唯一の出入り口とは反対側だった。逃げ場所はない。どうしよう。アキちゃんの魔法で脱出はできないのかな。

ちらつとアキちゃんを見上げると、アキちゃんは首を振った。あまり、頻繁に使えるような魔法ではないらしい。すぐうしろには、無慈悲な石壁があった。絶望的だった。

「若い魔術師よ、おまえは必ずたどり着く。偽りと嘘に塗り固められた偽物の楽園は」

男の人は、わたしとアキちゃんの目の前で立ち止まり、鋭いナイフを天高く振り上げる。

「おまえを殺すだろう」

まるで、呪いの言葉だった。

アキちゃんは、わたしを守るように抱きしめてくれた。ぎゅっと目を瞑ってくるべきときを待つ。

ごめんね、アキちゃん。わたしが間抜けなばかりに。でも、来てくれてうれしかった。わたしばかり嬉しくてごめんね。ふたり一緒なら、死ぬのは怖くないかなあ。アキちゃんにはいい迷惑だったよね。ごめんね。ごめんね。最後に、おばさんの焼いたアップルパイが食べたかったなあ。

散漫な意識が、けれど途絶えることはなかった。

おそろおそろ、目をあけてみると、男の人の口から、ごぼりと赤い塊があふれおちるのが見えた。

深々と、自分ののど元にささったナイフをいとしげになでて、彼はゆっくりと石造りの腰掛の上に崩れ落ちた。

展開についていけなくて、啞然としてしまう。なんで。

「あいつ、自分で自分の喉を刺しやがった……」

この異常な出来事を、わたしはうまく消化できる気がしなかった。そして、そんな時間も与えられなかった。

男の人が崩れ落ちた、その数瞬後、この小さな部屋いっぱいになる閃光がひろがった。無数のランタンの明かりも、夜の暗闇も簡単に飲み込んで、白い光に塗りつぶされる。

ねえ、アキちゃん。

わたしたち、これからどうなっちゃうんだろう。

黒い影

うつそうと茂った森の中を、気の赴くままに散策する。木の葉を透かして照るあたたかな陽光と澄んだ空気がきもちいい。

この森はわたくしのお気に入りの場所だった。内緒で を抜け出しては、よくひとりでこの空間を楽しんでいた。ここはわたくしだけの場所。わたくしだけが許された場所なのだ。

おだやかな気持ちで大地を踏みしめていると、突如、大きな泣き声が神聖な空間を切り裂いた。

少し甲高く、あまつたれたような、こどもの泣き声。

声の主を探して歩いてみると、すぐに見つけることができた。

ああ、かわいそうに。すっかり怯えて、 に かけている。きつと 国のこどもなのだろう。このまま放っておいては に み まれて になってしまふ。そうなってしまえば、 することなどできない。

わたくしはこどもを両腕で抱きしめて、あやしてみせた。すこしずつ泣き声がおさまっていく。かわいそうに。このこを に す術などあるのだろうか。

ああ、そうだ。わたくしのこの 。これをこのこに与えよう。これは に祝福された だ。きつとこのこを守ってくれるだろう。ちいさくかよわいいとしごよ。安心なさい。わたくしがかならずおまえを してみせるから……。

「ううん……かならず、やくそくするから……」

「リン！気がついたのか」

なんだか、背中が痛い。いや、全身が痛くて頭も重くて、気分もわるい。もうちょっとこのまま眠っていたいなあ。

「おい、寝るんじゃない。起きろよ」

しかし、容赦なく肩をつかまれ、がくがくと前後に揺らされる。なにがなんでも起こすつもりらしい。

「アキちゃん……ひどいよ……」

「なにがひどいもんか。いつまで経っても起きないおまえのほうがひどい」

うつすらと開けた視界に、最初にうつったのはアキちゃんの凶悪な顔だった。目を眇めて、こちらを睨みつけている。ほんきで怒ってるらしい。

「ずきずきと痛む頭を押さえながら、わたしはゆっくりと起き上がった。」

「今日ってなんかだいじなやくそくでもあったっけ？寝坊してごめんね。だから怒ってるの？」

「は？なに寝ぼけてんの。しっかりしろよ」

アキちゃんにつっぱねられて、わたしはすこしだけ冷静になって考えた。

しめつばい土のにおい、緑のじゅうたん、光をさえぎるように生い茂る木々。はっぱの隙間からわずかにさす太陽のあかり。頬をなでる風はひんやりとしていて、澄んでいる。正確な時刻はわからないけれど、朝なのだろう。ことりたちのさえずりがときおり耳を打つ。

ここって、山だ。

それもおそらく、わたしがアキちゃんとはぐれた山。

「あー！」

そうだ。わたし、へんな場所につれこまれて、へんなおとこのひとに捕まったんだ。

おとこのひとの首に深々と突き刺さったナイフ。異常な光景に怖いっているひまもなく、とつぜん現れた光に飲み込まれて……。

そこから、なにも記憶がない。

もしかして、あのへんな場所から、気を失ったわたしをアキちゃんが連れ出してくれたんだろうか。

「俺も気がついたらここにいた。おまえとまったく同じ状況だよ」
まさか夢……だったなんてことはないだろう。だって、アキちゃんも覚えてるんだもん。あれはたしかに現実にあった出来事なのだ。そう思いたくはないけど。

なんだかすつきりしないまま、わたしたちは再び王都を目指すことにした。

立ち止まっただけでも仕方がないし、積極的に関わりあいになりたくなかったというのも大きな理由だった。

もくもくと下山して、ふもとの村にたどりついたのは、ちょうどお昼をまわった頃だった。

「だーれもいないねえ」

村の地名が表記された看板の前をとおって、動物よけかなにかの木の柵をまたいで、ぽつぽつと建てられた民家の傍までやってきたが、ここにたどり着くまで、村人の姿を誰一人としてみることはなかった。

お昼時だから、みんな家でごはんでも食べてるんだろうか。

そう思って周りを見てみるけれど、どの民家からもかまどの煙は出ていないし、空腹を誘うよい匂いもしてこない。

「いくら田舎の村だからって、誰もいないなんてことはまずないはずだ」

アキちゃんは小さな民家を片っ端からノックした。けれど、どの民家からも返事はなかった。

村には、不気味な静けさが漂っている。

本来ひとがいるべき場所に、ひとがいない。それを意識すると、急に、この村がなにかとつもなくおそろしい場所に思えた。

臆病風に吹かれたわたしはアキちゃんにおいていかれないように、必死に彼のあとを追った。

そして、わたしたちが最後に訪ねたのは少し高い丘の上にある大きな民家だった。木の盾を意匠にした紋章がドアノブに刻まれている。

この村の村長の家だろうか。

アキちゃんが扉をノックする。一回、二回、三回。何度もノックを繰り返すが、返事はない。

やはり、この村には誰もいないのだ。

じんわりとした恐怖が足元に這いよってくる。一刻も早く、この村を離れたほうがいいんじゃないだろうか。なにかがおかしい。

「ねえ、アキちゃん……」

はやく村を出て、乗合馬車に乗ろう。

その声をかけようとしたときには、アキちゃんはもう姿を消していた。

村長宅の扉が開いている。勝手に中に入ってしまつたらしい。

このまま外にひとりで待っているのも怖くて、わたしもあわてて中にはいった。

玄関をくぐると、まず客間があつた。その奥にはキッチンがあつて、食事をとる大きなテーブルがある。椅子はぜんぶで四脚あつた。四人家族なのかな。怖さを少しでもまぎらわせるために、どうでもいいことを考える。

アキちゃんはキッチンにいた。堂々と食べものを物色している。

「な、なにしてるの、アキちゃん。誰かが帰ってくる前にはやくでようよ」

「どれも腐ってるな。荒れちゃいないが、テーブルも床もほこりが積もってるし、この家の住人はそうとう長い間留守にしているらしい」

「そんなことどうでもいいよ。ねえ、はやく乗合馬車に乗るところにいこうよ」

アキちゃんの腕をひっぱって、ひきずるようにして民家を出る。

民家を出たところで、胸をほつとまでおろす。この村に対して感じる気味悪さは変わらないが、他人の家に土足で踏み入る後ろめたさからは解放されたからだ。アキちゃんってけっこう図太い。

「この村、へんだよ。はやく外にいこうよ」

「あんまり引つ張るんじゃねーよ。それに急ぐな。転ぶぞ」

とにかく一刻も早くこの場を離れたかった。嫌がるアキちゃんをぐいぐい引つ張って、木の柵を乗り越えて村を出る。小石が敷き詰められた街道と思しき道をずんずん進み、村が見えなくなったところでやっと思ひと安心できた。

「はー。なんだったんだろう、さっきの村。誰もいないなんてぜったいおかしい。すごく嫌な感じがした。」

わたしは山を降りたことがないから、ふもとの村を訪れたのははじめてのことだったけど、アキちゃんはどうだったんだろう。

一歩前を歩くアキちゃんに、なんとはなしに聞いてみた。

「アキちゃん、あの村っていつつもあるの？」

「そんなわけないだろ。あれは異常だ。集団でどこか他の場所に移動したにしろ、緊急的で突発的ななにかがあの村を襲ったのは確かだな」

「そつか。なにもしらなかった」

「俺達の住んでいた森は、正確な意味で隔絶されてるからな……」

そこでふと、アキちゃんは考えるそぶりをみせた。ああ、これはよくない兆候だ。アキちゃんはいちどなにかを考え始めるとまわりが見えなくなるのか、話しかけてもなにをしてもかまってくれなくなる。

その予感の中で、思考の海に沈んだアキちゃんは、わたしがいくら話しかけてもなんの返事もしてくれなくなった。

ただもくもくと、乗合馬車乗り場を目指して街道を歩く。

太陽はすぐに西にむかって沈んで、あたりは飴色に染まっていく。だいぶ歩いた気がするけれど、誰ともすれ違わない。まるで世界には、アキちゃんとわたしふたりつきりみただった。

わたしたち以外の誰かがいない。ふだんは意識しない他人という存在をこんなにも心待ちにするのは、はじめてのことだった。

わたしがこんなにも不安がるのは、きつとあのへんな男のひとのせいだった。わたしたちではない誰かの死を見せつけられて、わた

したち以外の誰かの存在をこんなにも確かめたがらせている。

「……ついたみたいだな」

いつの間にか、思考の海から浮上したアキちゃんが言った。

彼の言葉につられて前方を見てみると、たしかに街道の近くに小屋のようなものが建っている。

あれが乗り合い場なんだろうか。自然と足が速まる。あたりは既に夜の気配に包まれていた。完全に夜になる前に目的地につけたのは幸運だった。

「疲れたねえ。でもうれしいな。馬車でいく楽ちんな旅だね！」

「さすがに今から乗車できる馬車はないだろうが、野宿はせずに見そうだ」

こころなしか、アキちゃんの声も弾んでいた。

しかし、小屋に近づくとつれて、その仔細がわかると、わたしたちは落胆せざるをえなかった。なぜなら、あたりが暗くなりはじめているというのに、その小屋にはなんの灯りももっていないからからだ。

小屋の扉には、木で作られた白塗りの看板が掛かっていた。『乗り合い場』と彫られた文字の下には『休業中』の文字。

つまり、ここはかつては乗り合い場であつたけれども、いま現在はそうではないということだ。

アキちゃんは小屋の扉に手をかけて、何度か前後に揺さぶった。鍵が掛かっているらしい。

軽く舌打ちすると、アキちゃんは腰に下げた袋から針金を取り出して錠前に突き刺した。地面に片膝をつき、扉に耳をあてて探るように繊細な手つきで針金を動かす。

「アキちゃん……それって……」

「うるせー。いま大事なことだから黙ってる」

まさかの、本日二度目の不法侵入。

アキちゃんは見事に、針金一本で小屋の扉を開けてみせた。同時に、かび臭いこもった空気がむうっと漂ってくる。

「なにしてんだ、さつさと入れよ」

「け、けど……」

「きたねえけど野宿よりはマシだろ。外で寝たいっていうなら、止めないけど」

少し意地悪な言い方で、アキちゃんはわたしの腕をとり、小屋の中に引つ張り込む。

薄暗い小屋の中を見回すと、案外広いことが分かった。

扉からそう遠くないところに、カウンターがある。おそらくここが乗合馬車の受付だったんだろう。待合室らしきところには大きなソファがふたつ並んであって、その向こう側には大きな戸棚がひとつあった。

待合室の中央には、青銅で作られたランプがひとつ吊るされている。アキちゃんは戸棚からランプの油を拝借して、ランプに火をつけた。ほっとするような、橙色の炎が夕闇に揺らめく。

「誤算だったな……まさか乗合馬車が使えないとは思ってなかった」
アキちゃんはひとりごとのように呟いて、ソファの上に腰を下ろした。わたしもならってアキちゃんの隣に座ると、半眼で睨みつけられた。

「ソファならあっちにもあるだろ」

その指摘はごもつともだったので、すぐごと向かい側のソファに移動する。紅色の布で覆われたソファはほこりっぽかったが、すわり心地はいい。勝手に無人の小屋を借りることに対しては抵抗があったが、背に腹は変えられない。せめてあまり汚さないようにしようと思決した。

「ほら、食えよ。それが今日の晩めし」

アキちゃんが放つてよこしてきたのは乾パンたったの3枚きりだった。

「これっぽっち？」

「馬車が使えないんじゃ、この先どうなるのか分かんねー。食料が手に入る目処が経つまでは節約しねえと」

育ちざかりの身としては、これはつらい。うらめしげなわたしの
気配が分かったのか、アキちゃんは嫌そうに眉をひそめた。

「もともとふもとの村で食料とか本格的に揃える予定だったんだ。
おまえは変なのに捕まるし、村は無人大し、馬車は使えないしで予
定は狂いっぱなしだ。そもそも、おまえがついてくること自体、予
定外なんだけど」

「それも人生をたのしくするためのスパイスだよ、きつと」

「いらねー。全力でいらねー」

ふたりで向かい合って、ちまちまと晩御飯……といえるかは微妙
だけど、泣き声をあげるお腹を慰めた。

ブーツを脱いで、歩きっぱなしで疲れた足をソファの上に投げ出
す。お風呂なんてぜいたくなことは言わないけど、せめて体が拭け
たらなあ。水場の近くに寄ることがあつたらアキちゃんにお願いし
てみよう。

閉じられた空間と、人の手による灯りによつてすっかり寛いでし
まっているわたしとは正反対に、アキちゃんは熱心に戸棚をあさっ
ていた。

食事を終えたら一気に疲労が襲ってきてしまつて、そんなアキち
やんを咎める元気はなかった。そもそも、この場所で寛いでしまっ
ている時点で、わたしにそんな権利はないんだけども。

「アキちゃん、なにしてるのー？」

「地図を探してるんだ。おおまかなものしか持ち合わせがないから、
もつとこの辺りについて詳しい地図がほしい。……おまえも手伝え
よ、ばかリン」

ぺしつとわたしの頭を叩いて、アキちゃんが睨んでくる。そんな
に怒ってばかりで疲れないのかなあ、アキちゃん。

そんな風に、のんきに過ごしているときだった。

とつぜん、谷底から聞こえる獣のような叫び声が空気を切り裂い
た。慌てて飛び起きたわたしはソファから転げおち、アキちゃんは
周囲をうかがうように身構えた。

今日は厄日だ。今度はなにが起こっているんだろう。窓の外を見てみると、もう完全に夜のとばりはおち、真っ暗になっていた。

「リン、窓に近づくな」

そういわれて、わたしはアキちゃんの傍に走った。

戸棚を背にして、アキちゃんは窓と扉に注意を払っている。もしも、仮に、何者かがわたしたちに危害を与えようと進入してくるなら、まずそこだった。

「あ、あかり、消したほうがいいかな……」

「……そう、だな」

アキちゃんの返答は歯切れが悪いものだった。

灯りを消すことにためらいがあるらしい。たしかに、外はまっくらだし、視界が限られるのはあまりよいことには思えない。

けれど、灯りがついていいるということは、そこにんげんがいるということが相手にわかってしまうということだ。

さきほどの声の主が灯りのある意味を理解するかはわからないが、灯り自体がなんらかの目印になってしまうことは確かだった。

そもそも、わたしたちを害する意思があるのか、ないのかも、わからないけれど。

再び、獣めいた叫び声が、今度は二度続けて聞こえた。最初に聞いた声よりも大きく、なにより、思っていたよりも近い！

どくんどくと耳の奥で心臓の音が響く。てのひらはいやな汗をかいている。アキちゃんの服の裾をつかもつと伸ばした手は、邪魔だとはかりにはねのけられた。行き場を失った手を胸の前で組み、わたしも耳をすます。

なに食わぬ顔で、見知らぬ何かはとおりすぎてくれただろうか。それとも。

「あ、アキ……」

「だまつてる」

どすんつと、小屋全体が揺れた。

大きく体が傾きかけ、あわてて戸棚にすがりつく。かろうじて転倒はまぬがれた。

顔をあげると、ほの暗い室内に、きらりと銀色の輝きが弧を描くのがみえた。腰元に隠していたナイフをアキちゃんがかまえたのだ。なにか、くる！

そう思ったのが先か、そのなにかが到達したのが先か、正確なところはわからない。

目の前で、黒い影のようなものとアキちゃんがもつれ合うように床に転がった。ランプの灯りに照らされて、黒い何かは姿を現す。その何かに陰影はなく、ただただ異様で、黒一色の、生き物と呼ぶことを躊躇わせる存在だった。

いうならば、これは、影そのものだ。

けれど、わたしたちのうしろを無邪気についてまわるかわいらしいものではない。もっと、なにか、まがまがしいものに思えた。

「あ、アキちゃん！」

黒い影が咆哮をあげる。びりびりと空気が震え、窓ガラスががしやんと割れる音が聞こえた。まるで、その圧倒的な力をわたしたちにみせつけるみたいに、影は大きくしなった。

アキちゃんは影の下敷きになってしまっていた。どうしよう。いまはかろうじて右半身が見えている状態だけれど、いずれぜんぶ飲み込まれてしまいそうだ。

わたしはとっさに戸棚をあけて、中に入っているものを黒い影に向かつて投げつけた。

お皿やコップ、スプーンといった食器類がつぎつぎと無残な姿で床に散らばる。黒い影はまったく堪えた様子もなく、まるで食事もするかのようになり、じわりじわりとアキちゃんの姿を隠していつてしまう。

「いのー！」

こんなところでアキちゃんを失うわけにはいかない。

そう思うのに、いったいどうすればアキちゃんを助けることがで

きるのか、ぜんぜんわからない。悔しい。こんなことなら、アキちゃんと一緒に魔法を習っておけばよかった。つい最近、同じような後悔をしたばかりだというのに。

そうだ。アキちゃんは、助けてくれたんだ。それなのに、どうしてわたしはアキちゃんの助けになれないんだろう。

「どっかいきなさい！ここはおいしいものなんてなにもないよ！」
わたしは黒い影にむかって体当たりをした。なんども、なんども、なんども！

けれど、影はびくともしない。

それどころか、わたしをもつかまえようとその体を伸ばしてきた。大きな黒い影が、しりもちをついて座り込むわたしにむかって覆いかぶさるうとする。逃げ場はない。このまま、しんでしまうんだらうか。

そのとき、影がまっぷたつに割れた。

上下に分断された黒い影は、あっけなく溶けるように消えてしまった。一瞬だった。

「へ……？」

いったいなにが起こったのだらう。

いや、それよりなにより、アキちゃんは無事なんだろうか。

わたしは床に倒れているアキちゃんに駆け寄ろうと立ち上がるが、すぐにへたりこんでしまった。足が震えていうことを利かない。なんとという役立たずな足なんだ。

「おや、生きてるね。君達は実に運がいい」

場違いな、なんとも明るい声だった。

声の主はアキちゃんの頭を靴で軽くこつく。すると、ちいさなうめき声が出た。ああ、よかった。アキちゃんは生きている。

ほっとするのもつかの間、声の主はわたしの目の前までやってきた。床にすわりこんだわたしは、声の主を仰ぎみる。

まだ若い、おとこのひとだった。細身の長身で、長めの金の髪をうしろで括っている。少し切れ長の目は、まるで夏の青空のように

澄んだ色をしていた。服装は至って簡素で、あら染めをした麻の服の上から苔色のマントを羽織っている。そしてその左手には、長く鋭い銀色の片刃の剣が握られていた。

じっと見つめっていると、急におとこのひとは破顔した。

「なんだ。まだこどもか、残念。そっちの坊主、手当てしてやるから運ぶの手伝ってくれるかい？」

まったく汚れのない長剣を鞘にしまって、アキちゃんのからだを動かそうとするおとこのひとの姿をみて、はじめて、助けられたのだとわたしは実感した。

王様の目

ばちばち、と焚き火の爆ぜる音がする。

あたたかな火をみると安心する。こんな風にまっくらな闇に支配された夜はとくに。

毛布にくるまって静かな寝息を立てるアキちゃんに寄り添いながら、わたしは焚き火の前でできばきと食事の用意をするおとこのひとを眺めていた。

おとこのひとの名前はカナン。

黒い影を退治して、わたしとアキちゃんを助けてくれたひと。

あの小屋のあたりは危ないから、といって、カナンさんはわたしと気絶したアキちゃんを彼のキャンプ地までつれて来てくれた。

他に仲間がいるのかな、って思ったけど、カナンさんはひとりみただった。

街道近くの林の前に焚き火をして、今晚は野宿をしているらしい。屋根のある小屋のほうが安全に見えるけれど、カナンさんは、街道のほうがあつ黒い影が寄つてこないから安全なんだつて教えてくれた。

わたしとアキちゃんを突然襲つた黒い影。あれつていつたいなんなのだろう。

「君もたべる？」

「え！」

カナンさんは、焚き火で焼いたほかほかのパンをさしだしている。「あ、あの、そんな、助けてもらったのに食事までお世話になるわけには！」

そのとき、わたしのおなかは、わたしの意に反してぐうぐうと盛大な音をたてた。

は、はずかしい！これははずかしすぎる！

顔を真っ赤にするわたしに対して、カナンさんはくすつと笑つて

頭をなでてくれた。そして、あつたかいパンをわたしの手に握らせた。

「遠慮しなくていいよ。育ち盛りなんだから」

「……。はい。ありがとうございます！」

カナンさんは微笑んでいる。なんだか、すごくやさしいひとだ。

焚き火のあつたかい火に負けなくらい綺麗なさらさらの金髪に、澄んだ夏の青空のような瞳。ちょっと目の形は鋭いけれど、整った顔立ちで、背だつてとっても高い。なんだかまるで、おとぎ話の中にでてくる王子様みたいだ。

「君たち、どうしてあんなところにいたの？」

「あんなところ？」

カナンさんはうなづいた。

「そう。このあたりは黒い影に支配されていて、ずいぶん前に避難勧告が出ているはずだけど」

「避難勧告……。はじめて聞きました」

「おかしいな。すべての村落に到達したはずだけど」

「あ、その、わたしたちすっごい山奥に住んでるんです。村とかじやなくって、家族単位で。だから、かもです」

いまさらながら、あのふもとの村が抜け殻のようになっていた理由を知った気がする。きつと急に避難するようにいわれて、あわててみんな別の場所に移動したんだ。

だから、あんな風に、日常からにんげんの姿だけが切り取られてしまったみたいになつていたんだ。

「そうか。君たちを保護できてよかったよ。家族ってことは、ご両親もまだこのあたりに留まっているのかな？」

「あ！ほんとうだ、どうしよう。アキちゃんのお父さんとお母さんも、たぶんなにも知りません。山の奥でいつもどおり生活してます」「どのあたりに住んでいるのかな。教えてくれれば、保護するよう」に仲間に報せておくよ」

このあたりの地理には疎いんだけど、いままで歩いてきた記憶

を頼りにカナンさんに家の大体の位置を伝える。

おじさんとおばさん、大丈夫かな。いままで平気だったのだから、大丈夫だと思うけれど。

あの黒い影を思い出して、ぶるっと背筋が震える。

いまは平気かもしれないけれど、明日は平気じゃないかもしれない。やっぱり、一刻も早くおじさんやおばさんも保護してもらおうのが一番だと思う。

でも、保護って、カナンさんってなにものなんだろう。

「ところで、君たち、こどもふたりでどこに行くつもりだったのかな」

「えっと、王様に会いに」

ずっと優しい表情を浮かべていたカナンさんの顔が、一瞬、険しいものになった。

あれ。わたし、なにか変なこと言ってしまったんだろうか。

「王様に？ どうして？」

「あの、えっと……頼まれて……」

「誰に？ いつ？」

「手紙が、きて、それで」

あれ。カナンさんとの距離が、不必要に近い。

さっきまで、焚き火の向こう側にいたのに、急に、ぐっと近くにいる。どうしてだろう。なんだか、怖い。

「それで？」

カナンさん、笑ってるけど、笑ってない。

「……それで……」

「リン、言う必要はない」

アキちゃんの声だ。横をみると、上半身を起こしたアキちゃんが凶悪な目つきでカナンさんを睨んでいた。

「おや、目が覚めたのかい。よかった。影に侵食されている様子もないみたいだね」

「おまえ、誰だよ」

カナンさんからわたしを遠ざけるように、アキちゃんは手でうしろに下がるように伝えてくる。

カナンさん、優しいけど、なんだかいまは怖い。

アキちゃんの背中に隠れるようにして、わたしはカナンさんを伺った。

少しだけ考えるそぶりをみせてから、カナンさんは口をひらいた。「僕は、王様の騎士。この国の隅々まで、王様の意思を伝えるべく活動している。たとえば、君たちのように影に襲われているひとを助けたり、まだ影の土地に留まっているひとを避難させたり、いろいろしてるよ」

王様の騎士！なんだか、すごく遠い世界のひとみたいだ。

でも、言われて見れば納得かもしれない。困っているわたしたちを助けてくれたし、さっきちょっと怖かったのは、王様に関する話がでたから、警戒したのかも。だって、王様って言葉を出す前のカナンさんは、ほんとうにほんとうに優しくかったのだ。

けどアキちゃんは、目を半眼にしてカナンさんに悪態をついた。

「うさんくせー」

「僕は嘘はついていないよ。さて、僕は正直に答えた。君たちはなにもので、どこに行こうとしているのかな？」

カナンさんのまっすぐな目。

嘘をつくことを許さない、そんな目だ。

アキちゃんは、ふっと息を吸い込むと、騎士であるカナンさんを真正面から見つめた。

「俺はアキサリス。魔術師だ。こっちのチビはリン。ふつうの人間だ。俺たちは、王都に用がある。それだけだ」

たしかに、嘘はいついていない。いろんなことをはしょってるけど。「そう。そちらのお嬢さんは、王様に会いにいくと言っていたけれど」

「は？」

とたん、アキちゃんの怖い目がわたしに向けられる。

薄氷のような冷たい色の瞳に浮かぶ色は、苛立ちだ。わたしはあわてた。

「だ、だってだって、王都のえらいひとに会いに行くんでしょ？えらいひとっていったら、王様じゃないの??」

「……。憶測で勝手に他人にぺらぺら話すなよ、リン。めんどろなことになるだろ」

心底あきれたといった感じのため息をつかれ、軽く頭を叩かれる。すると、カナンさんは瞠目して首をかしげてみせた。

「おや、彼女の勘違い?」

「まあ。とにかく、俺たちは王都に用がある。べつに、悪さしに行くわけじゃねーし、騎士さまの目のかたきにされるような覚えもない」

「……そうか。最近、不穩だから、少し神経質になっていたみたいだ。ごめんね」

カナンさんはアキちゃん言葉にいささか得心がいかないようだったけれど、ひとまず疑問はおさめてくれたみたいだった。

「お詫びとってはなんだけれど、君たちを王都まで送ってあげよう。少し寄り道をするけれど、安全は保障するよ」

それは、願ってもない申し出だった。

わたしはもちろん、よろこんだ。だって、カナンさんは騎士で、黒い影に対抗できる力をもつひとだ。そんなひとが同行してくれるなんて、こんなに心強いことはない。

「わあ。よかつたね、アキちゃん!」

「……。いらねー」

「どうして??カナンさんがいてくれたらすごく心強いよ。あの変な影だって、怖くないよ!」

わたしの言葉を無視して、アキちゃんはカナンさんに向き合う。

「この辺で王都行きの馬車が出てる町を教えてください。あとは自力でなんとかできる」

「そう?けど、君たち、お金はあるの?」

「馬車に乗れるくらいは」

「黒い影が出るようになってから、危険になったからね。とてもじゃないけど君たちが払えるような金額では、馬車には乗せてくれないよ」

おかね……。

急に現実的な問題が立ちふさがった。

「意地悪で言ってるんじゃないんだ。事実を伝えているだけで。僕だって、君たちみたいなことをこんなところに放り出していくのは忍びない。それだけなんだ」

カナんさんは、まるで諭すようにアキちゃんに告げた。

「アキちゃん、カナんさんがああ言ってくれてるんだよ。せっかくだし、甘えようよ」

「おまえさ、どれだけ単純なんだよ。簡単に懐柔されてるんじゃないよ」

アキちゃんは眉をひそめて、険しい顔をしていた。

きっとアキちゃんも迷っているんだ。どうすればいいか。わたしの中の答えは決まっている。アキちゃんを説得しよう。

「けど！また、あの黒い影に会っちゃったらどうするの？」

「次は俺がうまくなんとかする。大丈夫だ」

アキちゃんはかたくなだった。

なんでもやるうとすることは悪いことじゃない。けど、助けを差し伸べてくれている手を跳ね除けて、進もうとするのは賢いことだろうか。

きつと、アキちゃんはいろんなことを考えて、躊躇っているんだろう。

けど、わたしの中では、あの光景が、アキちゃんが黒い影に覆われてしまったときに感じた恐怖でいっぱいだった。

もしかしたら、今後、またおなじことが起きるかもしれない。もしそうなったとき、わたしではアキちゃんを救えない。でも、カナんさんなら助けられる。

アキちゃんを失うのは怖い。

けど、王都には行かなくてはならない。

「アキちゃん、わたし、いやだよ。もしも、また、アキちゃんが黒い影に飲み込まれそうになっちゃったら……アキちゃんがしんじやうのは嫌だよ。もうあんなの見たくないよ。だから、カナンさんと一緒にいこうよ」

アキちゃんはわたしを見て、戸惑ったように目を泳がせた後、舌打ちをした。

「……ちつ。わかったよ。リン。だから、泣くなよ」

困ったような声音とはうらはらな乱暴な手つきで、毛布を顔にぶつけられる。

毛布をみてみると、小さな染みが広がっていた。どうやら、わたしは泣いてしまっていたらしい。

「話はまとまったかな？」

「ああ。けど、その前に。あんた、王の騎士だっていったな。証拠はあるのか？」

「あるよ。この首飾りは騎士の証。しってるかな？」

カナンさんが見せてくれたのは、薔薇と剣の意匠が施された銀色の首飾りだった。アキちゃんの首飾りと少し似ているかもしれない。いまは、服の下にしまわれてしまっていて見えないけど、赤色の宝石は薔薇の形をしていたように思う。

「ほんものなの？アキちゃん」

「ああ」

アキちゃんは、ほんの少しだけ警戒を解いて、カナンさんに向かってぺこりと頭をさげた。

わたしもあわてて、アキちゃんにならう。

「迷惑はかけないようにする。だから、よろしくおねがいします」
そんなわたしたちにむかって、カナンさんは、やさしく微笑んでくれた。

霧の村

王都に向かう道すがら、カナンさんにあの黒い影について尋ねてみた。

「僕たちも、影について、はっきりとしたことは分かっていないんだ。遙か昔から、この国では黒い影の存在が確認されているけれど、ここ十年ほどで急激に増えた。結果、国の一部は影にのっとられてしまっているような状態だ。影は僕たちを侵食し、僕たちと同化する」

「のみこまれたら、どうなるんですか？」

「わからない。いま、僕たちにできるのは影を追い払うことくらいで、根本的な解決はできていないんだよ。この国の王様も、他のヒト族の族長たちも、頭を抱えているし、頼りの神の子も沈黙を守っている」

カナンさんは、憂いを帯びた表情で、ため息をついた。

あまり現実感がないけれど、国全体で大変なことになっているらしい。

「他のヒト族とか、神の子ってなんのことですか？」

ずっと黙って歩いているのも苦痛なので、疑問に思ったことも聞いてみる。すると、カナンさんはすごく驚いた顔をした。

「君、本気でいつてるのかい？」

「リン、おまえってほんとうにバカだったんだな」

ずっと黙っていたアキちゃんが、反応しなくていいところで反応してきた。

目を半眼にして、ばかにしたように口をゆがめて笑っている。ひどい。

「だ、だって、ずっと山奥にいたんだもん。しかたないよ」

「環境を言い訳にするなよ。俺だっておまえと一緒にだ。けど、この

国の成り立ちも、かたちも、一般常識的なことは知ってる」

「ぬけがけだ！アキちゃんずるい！」

わたしたちの言い争いを、カナンさんはやんわりと仲裁する。

「まあまあ、知らなければ、知ればいいんだよ。他の種族というのは、僕たち人間以外のヒトのこと。精霊族や、獣人族が代表的かな。精霊族は実体をもたないヒトで、とても知能が高い。長命で、鉱石や樹木などの自然物に好んで棲んでいる。獣人族は獣と人間の中間みたいなヒトで、身体能力にとっても優れている。反面、魔術なんかは苦手みたいだね」

「ふむふむ」

「この国を統治しているのは人間の王様だけれど、いろんなヒト族が暮らしている国だから、それぞれのヒト族の代表みたいなひとが族長って呼ばれていて、王様に色々と言進して、よりよい国づくりをしようとしているんだよ」

流暢に話すカナンさんの言葉を引き継いで、今度はアキちゃんが話し出す。

「神の子ってのは、この国を作った男神のこどものことだ。神の声を聞き、すべてのひとの幸いのために国を見守る存在っていわれている。うさんくせー話だよな」

「はは。この国の偉いさんが聞いたらすごく怒るよ、それ。僕も正直、うさんくさいっていうのには同意だけれどね」

朗らかに笑うカナンさんとは対照的に、アキちゃんは軽く肩をすくめて口をつぐんだ。

それから、カナンさんは物を知らないわたしにいろいろなことを教えてくれた。

たとえば西のほうには魔法使いだけの都市があったり、東には精霊族のたくさんすむ鉱山があるんだって。どんなところが想像もできないけど、聞いていただけでわくわくした。

そんなとき、ふと、目の前がぼんやりとした白いもやに覆われていることに気がついた。

「おや、霧が出てきたみたいだね……。はぐれないように。この街道の先に、村がある。避難してない住民がいまいかどうか確かめないといけないから、ちょっと時間をもらうけど、いいね？」

カナンさんが指差したのは、大きな街道から横道にずれた、小さな街道だった。

わたしたちはカナンさんに従って、霧の中を進む。はじめは整えられていた道も、しだいにでこぼこになり、緑の匂いが濃くなった。空を見上げると、ぼんやりとした白い太陽が中天に差し掛かっていて、そろそろお昼だな。なんてことを考えていたら、アキちゃんの背中に顔をぶつけた。

「どうしたの？急に立ち止まって」

「なにか、おかしい」

おかしいのはアキちゃんだ。

難しい顔をして立ち止まっていたら、カナンさんからはぐれてしまふ。

考え込むアキちゃんの背中をぐいぐい押してちょっと歩いていくと、急に霧が晴れた。ちょうど道の脇に看板が立っていて、その看板の前でカナンさんはわたしたちを待っていてくれた。

「行こうか。村はすぐそこだよ」

「はい」

そして、わたしたちは小さな村に到着した。

その村にはたくさんのおひとがいて、がやがやと活気にあふれていた。家の外で炊き出しを行っているようで、とてもいいにおいが漂ってくる。

「こんにちは。みかけないひとね」

村の入り口の前で立ち止まっていると、綺麗なおんなのひとに声をかけられた。長い黒髪を丁寧にひとつにまとめている、服装は簡素だけれど清潔感があった。

「あの、えと、わたしたち、王都に向かってる途中なんです」

「あら。じゃあ旅をしているのね。すてき。それに、あなたたちと

つても運がいいわ。今日はお祭りの日なの」

おんなのひとは、にっこりと笑って、わたしたちを村の中へと導いてくれた。

「私の名前はエルゼ。外のひとが来てくれるのは久しぶりよ。うれしいわ。せつかくだからゆっくりしていいわね」

エルゼさんはとても気さくな感じのひとで、今日の炊き出しは食べ放題であることや、お祭りは明日の朝まで続くことなど、いろいろ親切に教えてくれた。

「深夜になると、村の者はみんな仮面をかぶるの。悪い霊に魂をとられないように顔を隠して、みんな火を囲んで朝まで踊るのよ。よかつたら、あなたたちも参加してみたらどうかしら。仮面は炉辺でまだ売ってると思うわ」

「へー。楽しそうだねえ。ね、アキちゃん」

村の炊き出しのおかげですっかり満腹になったわたしは、とても上機嫌だった。

しかし、アキちゃんはまだしも、カナンさんまで難しい顔をして考え込んでいる。

無愛想な男たちは放っておいて、わたしは親切なエルゼさんと村を一緒にまわることにした。

似たような小さな木造の家が、小さな池を囲むように並んでいる。道端のあちこちには花が植えてあった。池のほうに目をむけると、祈りをささげる一体の乙女の石像がたっており、そのすぐ傍にはまるで彼女を守るように大きな木がそびえていた。

「おねえちゃん、どこからきたの？」

「おねえちゃん、どこにいくの？」

お祭りに使うんだらう、秋に咲く色とりどりの花を腕に抱えた小さなこどもたちがわたしとエルゼさんを囲んだ。

くりくりつとした大きな目には好奇心が宿っていて、いまにもあふれ出してしまいそうだ。かわいいなあ。

「えつとね、王都にいくの」

そう答えると、こどもたちは口ぐちに叫んだ。

「すごい！あたしもいつてみたいなあ」

「おおきくなったら、ぜったいいいく！」

「たっくさんのひとがいるんだよね。それで、たっくさんおいしいものがあるんだよね！」

目をきらきらさせて、駆け回る姿はげんきいっぱい、見ているだけで元気になれそうだ。

王都ってわたしも行ったことがないから、実際どんなところかは分からないのだけれど、すてきなところだったらしいなって思った。はしゃぎまわるこどもたちからお手製の花飾りをひとつもらって、わたしとエルゼさんは池の傍に寄った。

池の真ん中は陸地になっていて、両膝をついて祈りを捧げる乙女の石像が立っている。

きらつと光るものが見えて、よくよく目を凝らしてみると、少し伏せられた乙女の両目には水晶のような石がはめられているようだった。

「この村が出来る前から、あの石像はあったのよ。いつの時代かは分からないけど、ある青年彫刻家が貴族の令嬢にかなわぬ恋をして、その想いを閉じ込めるために作ったのがあの石像なんだって」

「そうなんだ。ロマンチックだねえ」

「でしょ。祈る乙女の両目は、青年の想いが結晶化した石で、それに触ると恋が叶うっていわれてるの！」

「ええ！」

「……っていう噂話を広めたら、ちょっとした村おこしになると思わない？」

「冗談だったらしい。ペろつと舌をだして、エルゼさんはいたずらの見つかったこどものように笑った。

見た目は、長い黒髪に神秘的な紫の瞳の、おとなっぽい綺麗なおんなのひとなのに。

かわいいなって思った。

寄り道をしながらエルゼさんと話していたら、村の入り口に戻ってきていた。

おおよそ十数分も歩けば一周できてしまいそうなおきな村だったけれど、お年寄りからこどもまでたくさんのがいた。みんな村のひとで、外から来ているのはわたしたち三人だけらしい。

「ここは街道に近い村だけれど、少し南にいったところに大きな町があるの。旅人はみんなそちらの町に滞在するから、この村に立ち寄るのは商人さんくらいよ」

エルゼさんがそういって、炊き出しを作っているおばちゃんがつづいた。

「この村には木彫りの置物くらいしか特産品がないからねえ」

「いい村なのだけれどね。ふだんひとの出入りがないから、宿とかもないのだけど。……たしか一番北側の家は空き家のはずだから、今夜はよかつたらそこに泊まっていってよ」

人好きのするやわらかい笑顔でエルゼさんが言った。

おばちゃんも、名案だとばかりに「それがいい、それがいい」と薦めてくれている。

村のお祭りにも興味があるし、やはり、屋根のあるところで眠れるというのは、非常に魅力的だった。

「ありがとう！えへへ、お言葉に甘えることになるかも」

「鍵はかかってないから、好きに使ってくれても大丈夫。ふふ。うれしいな。そうだ、仮面も持って行って」

エルゼさんは炉端で仮面を売っているおじさんに「二、三言つげると、木製の仮面をみつつもわたしにくれた。でも、これはさすがに悪い。売り物をただで貰うわけにはいかない。」

「あの」

「いいから！だって、今日はお祭りなんだもの。もともと村人しか参加しないし、おじさんだってはなっから売れるつもり、なかったって」

そうなんだろうか？ちょっと色黒の仮面売りのおじさんを伺って

みると、おじさんは無言でうなずきを返してくれた。

お金はアキちゃんが全部管理しているので、わたしはいつさい持つていない。

どうするべきか考えあぐねていると、エルゼさんにぐいぐいと背中をおされた。

「いいからいいから。連れのおふたりにもよかったら参加してねって伝えておいて。やっぱり、参加してくれるひとは多いほうが楽しいもの」

「は、はい！」

「じゃあ、私はちよつと準備の手伝いもあるからここで失礼するね。また、あとでいろいろ話しましょ！」

そうして、エルゼさんと手を振って別れる。

アキちゃんとカナンさんは、村の入り口から少し離れた木陰に座っていた。腕の中にあるみつつの仮面を確かめてから、わたしはふたりに近寄った。

「おかえり。急に姿が見えなくなったから心配したよ」

カナンさんは、わたしの姿をみとめると、立ち上がって駆け寄ってくる。背の高いカナンさんを見上げて、わたしは言った。

「ごめんなさい。ふたりとも考え事してたみたいだし、暇だったからエルゼさんに村の中を案内してもらったんだ。なんかね、今日はお祭りだね、泊まっていいよっていいよってしてもらえたよ」

ふふんつとわたしは胸をはった。寝床をゲットは、けっこういい成果だと思っ。

けど、カナンさんはあまりいい顔をしなかった。

「そうか……。少しね、考えていたのだけれど」

「この村はおかしい」

いつの間に近くに來ていたのか、アキちゃんが険しい顔で村を睨んでいた。

カナンさんも、アキちゃんの言葉に異論はないようだった。

「僕たちは、危険と思われる地域の村落に対して、たしかに避難勧

告を行い、彼らをより安全な町に連れて行った。もちろん住み慣れた故郷を離れることに対して難色を示す人々もいたけれど、黒い影の恐怖を実感すれば、理解してくれた」

一呼吸おいて、カナンさんは憂いを帯びた瞳で村を見据えた。

「つまりね。こんなに村人が残っているわけがないんだ」

祭りの夜

わたしは混乱した。

「いったん避難して、また戻ってきた、とか」

「それはないよ。ここから南に大きな町があるのだけど、そこで検問が行われている。地理上、その町を通らずにこの地にたどり着く手段はないんだ。険しい山脈を越えれば戻ってこれないこともないけれど、お年寄りやこどもにはまず山越えは無理だよ」

村人が残っているわけがない村には、いま、たくさんのひとがいる。

おじさんも、おばちゃんも、こどもたちもエルゼさんも、残っている。

黒い影のことなんて、なにも感じさせない穏やかな村だ。そんな村に住むおだやかな村人たち。なにもおかしいところはない。おかしいところはないはずなのに。

「じつは、最初から避難していなかったのかも」

「それもありえない。いまはほぼ全ての村落の退避が終わり、とりこぼした住民がいらないか調査している段階だ。こんなに大勢の村人がいること自体がありえないんだよ」

カナンさんは、しきりにありえないと繰り返すけれど、そのありえないことが実際に起こっている。

この状態に説明はつけられないけれど、まずは、住民を避難させるのが先決なのではないだろうか。うん。めずらしくわたし冴える気がする。

そう進言すると、カナンさんは静かに首を振った。

「何人かの村人に黒い影のことを伝えたのだけど、まるで反応がないんだ」

「ええ？」

「危険なのだ伝えても、笑って流される。次の瞬間には、なにもなかったかのように祭りのことを口にする。彼らはどこかおかしい」
カナンさんは嘆息し、困ったようにわたしたちを見つめた。

「いちど、大街道に戻ろう。仲間に連絡をとって対策を考えることにするよ。君たちを危険に巻き込むわけにはいかないからね」

腕の中にあるみつつの仮面。

真ん丸いお面に、目ののぞき穴と、呼吸をするための口元の穴。ちよつと不気味で、けど愛嬌がある。

村のお祭り、参加したかったな。せつかく、エルゼさんが仮面をくれたのに。

せめて、彼女に別れのあいさつをしたかったけれど、アキちゃんもカナンさんも許してはくれなかった。

日が傾ききらない内に、大きな街道に戻るため、わたしたちは急ぎ足で村を去った。

整備されていない細い街道。でこぼこ道を歩くのも慣れてきた。やっぱり道の途中で霧がかってきて、周囲の詳しい風景はわからないけれど、そろそろ大きな街道にたどり着くだろう。

そう思っって顔を上げると、前を歩いていたアキちゃんが立ち止まっていた。

またもやアキちゃんの背中に顔をぶつけてしまったわたしは、抗議の声をあげる。

「もー。あぶないよ」

「……やっぱりな」

なにが、やっぱりなんだろう。

わたしが訝しんでいると、先頭を歩いていたカナンさんがあわてた様子でわたしたちの元に駆け寄ってきた。

「ごめんごめん。霧にまかれて方向を間違ってしまったみたいだ」
背伸びをして、アキちゃんの背中越しに前を見てみると、霧のむこうにうつすらと人家の影が映っているのが見えた。

どうやら、村に戻ってきてしまったらしい。

「暗くなってきたし、仕方ないよ」

「リンちゃんは優しい女の子だね。お兄さんは非常にこころが救われたよ」

よほど、道を間違えたことがカナンさんはショックだった様子で、がつくりと肩を落として、それからわたしの頭をなでてくれた。

「えへへ」

頭、なでられるの嫌いじゃないかも。

このときわたしは、よほどしまりのない顔をしていたんだろう。

アキちゃんが横目であきれたようにわたしを見て言った。

「おまえみたいにトロクセー奴が道を間違えるのなら信憑性はあるけどな」

「どういう意味!？」

「聞いたとおりだろ。カナンさん、俺たちは道を間違えたんじゃない。道を間違えさせられている」

アキちゃんは断言した。

「村の外に出ようとしたって無駄だろう。俺たちは何度でも、この村に戻ってくる。おかしい感じはしていたんだ」

「つまり?」

「俺たちは、この村の何者かの魔力によって、村に閉じ込められてしまったってことだ」

そんなこと、ありえるんだろうか。

アキちゃんの言葉を聞いたカナンさんは、難しい顔をして、霧のむこうにみえる村を見据えた。

「アキサリス君、君は魔術師だといっていたね。僕はあいにく、魔術の才能はさっぱりで、あまり実感が無いのだけれど。僕たちは村に潜む何者かによって、人為的に村の外に出れなくされた。ということかな」

「ああ。周囲の魔力の流れがあつた村を中心にして、いびつな流れになつている。術者は間違ひなく村内にいるな」

「けど、アキちゃん、なんのために?」

「それが分かれれば、苦勞はしねーよ」
「ごもつとも。」

わたしたちを閉じ込めるひとが本当に村にいるとして、一介の旅人を軟禁してなんになるっていうんだらう。

得をするひとなんて誰もいない。それとも、わたしがなにか見落としてるだけなのだろうか。

考えていても答えが出るわけでもないし、村から離れられないのであれば、せめて、暖のとれるところに移動しようということになった。このあたり一帯が術者のテリトリーになっているので、魔術的な脅威は変わらないってアキちゃんも言っていた。

裏手から村に入り、エルゼさんが紹介してくれた空き家にたどり着く。鍵は掛かっていなかった。木組みの小さな空き家で、定期的に掃除がされているのか、埃ひとつない綺麗さだ。

玄関はなく、扉を開けばすぐに室内という簡素な家だが、じゅうたんもソファもあって居心地はとってもよさそうだった。

ソファに座って、四角い窓から外をみると、もう日は暮れかかり、村の景色は夕焼け色に染まっていた。

「そろそろ、お祭りの踊りがはじまるのかなあ」
「さあな」

手荷物をほどいて、アキちゃんは黙々と整理整頓をしている。カナンさんも、腰に下げた剣の手入れをはじめていて、かまってもらえるような雰囲気ではない。

しばらくわたしはソファの上で足をぶらぶらさせていたが、外が夕闇に包まれるころにはおとなしくすることに飽きてきた。
よし。

お祭りにいってみよう！せっかくだし！

「は？おまえ、馬鹿？それとも俺の耳がおかしいの？」

と、アキちゃんに真っ向から反対された。

「術者が村にいるって言っただろ。わざわざ危険な場所につっこむ奴があるかよ」

「でもでも。この村とその周囲一帯はすでに術者さんのテリトリーなんでしょ？なら、村の中にいようが外にいようがたいして変わらないって」

「あくまで魔術的には、だ。人為的な脅威は読めない。相手に敵意があるかも不明だが、下手に動かないほうがいい」

アキちゃんは慎重だ。顔は無茶をしそうな悪人面だというのに。ふくれるわたしに、救いの手をさしのべてくれたのはカナンさんだった。

「虎穴にはいらずんば虎子を得ず、ともいうし、一度、その村の祭りの偵察に行く必要はあるかもしれないね」

「うんうん！ていさつ、ていさつ！」

「おまえ、ぜつたい暇つぶししたいだけだろ」

わたしとアキちゃんをおいて、カナンさんひとりで偵察に行くか否かでもめたが、結局、離れるよりは固まって行動したほうが安全だろうという結論におちついて、はれてわたしは村のお祭りに参加することになった。

エルゼさんも、参加する人数は多いほうがいいっていったもんね。

あからさまに不満げなアキちゃんと、装備を整えてきりつとしてるカナンさんに、わたしはエルゼさんからもらった仮面を渡した。

目の部分にふたつ穴と、口もとにひとつ穴があいている木製のシンプルな仮面で、かぶってみると、ぱつと見、誰が誰だか分からない。

「はぐれるなよ」

アキちゃんに、念を押された。

すっかり暗くなった外。冷たい夜気に身震いする。周囲の人家には明かりが灯っていないかった。村人総出で祭りを行っているんだろう。

遠くに、夜空を焦がす赤い炎が見えた。ちょうど村の中心にある池の真ん中の陸地で、燃え盛る炎。それを囲むように、輪になって

踊る村人たちの長い影がうねりながら地面に伸びている。

老いも若いも、みな一様に仮面をかぶって、踊る姿は、誰もがまったくおなじ人間のように見えた。炎を中心にしてひとつの生き物が、しずかに呼吸をしているようだ。

踊るひとびとと、うねる影。

じっと見つめていると、どちらが影で、どちらが本物なのか分からなくなってくる気がした。

「来てくれたのね、嬉しいな」

はっと、わたしは振り向いた。エルゼさんが笑っている。

一瞬気が遠くなっていたみたいだ。わたしは頭を振って、気をしっかり保った。

「うん。せつかくだから。でも、わたしだってよくわかったね」

仮面を外そうとすると、そつと腕に手を添えられてエルゼさんに止められた。

「お祭りで仮面を外すのはマナー違反よ」

「え。でも、エルゼさん」

あれ。さっき、たしかにエルゼさんの笑顔を見た気がしたんだけど。

エルゼさんは仮面をかぶっていた。夜の闇にとけてしまいそうな黒いガウンとスカート、手袋をはめている。

「さ。リンちゃんも踊りましょう。朝までずっと踊るの。過去も未来もみんなひとつになって、新しい朝をむかえるの」

誘うように、エルゼさんの黒い手が差し伸べられる。

「うん！あ、けど、アキちゃんとカナンさんも誘わなきゃ」

エルゼさんの手をとって、わたしはまわりを見渡した。一生懸命さがすけれど、ふたりの姿はいつころに見つかからない。

「ふたりはもう先に、踊っているのではないかしら。ね。早くいきましよう。早くしないと、黒い影につかまってしまおうわ」

「……え？」

黒い影をエルゼさんは知っている。

危険を知っていて、なぜ村に留まっているのだろう。
わたしは、仮面の奥に隠された、エルゼさんの紫色の瞳を見つめる。

つながれたわたしとエルゼさんの手。その手を振り払う気は起きなかった。彼女が危険だとは思えない。

「ああ、また、やってきた。私の村に、黒い影が」

わたしの手をぎゅっと握って、エルゼさんは震えていた。

急に足元がひえびえと冷えてきて、さきほどまで燃え盛っていた炎が一瞬で消えた。村人たちの姿も見えなくなって、わたしとエルゼさんだけが、暗闇に取り残されてしまったかのようだ。

「リン、逃げろ！」

アキちゃんの声が遠くから、けれどはつきりと聞こえた。

どこにいるんだろう。声は聞こえるのに、姿がみえない。不安がるわたしを、エルゼさんのあたたかな両腕がやさしく包み込む。

エルゼさんの肩越しに、わたしは見てしまった。暗闇から分離するように現れる黒い影たち。

ひとの形をしたそれは、わたしたちを取り囲み、じわりじわりと間合いをつめてくる。

逃げなきゃ。でも、どこに？

黒い影がわたしの頭をめぐけて突進してくる。怖い。でも、逃げられない。わたしはぎゅっと目をつむった。

痛みはなかった。

耳元で、かすかな声。

「こんどこそ、守ってあげる。私の大切な」

エルゼさんがかばってくれたのだと、ようやくわたしは気がついた。

このままでは、エルゼさんが影に取り込まれてしまう。わたしはまた、なにもできないのだろうか。アキちゃんのとくと同じように。「だめ！エルゼさん、一緒に逃げよう！」

「いいの。私にも、ちゃんと守ることができて、嬉しい」

からんと、エルゼさんを隠していた仮面が落ちて、闇に吸い込まれていった。

エルゼさんは笑っていた。泣いていた。後悔していた。嘆いていた。悲しかった。寂しかった。つらかった。エルゼさんの隠していたごちゃまぜの感情が、一気に胸を突き抜ける。

いい村だった。この村が好きだった。

たくさんの人々を見てきた。みんな私のこどものようなものだった。

のどかな風景。きらきらした日々。

笑顔を浮かべるあのこと一緒に笑って笑って。

悲しみにくれるあのこの頭をそっとなでて。

ずっと、永遠に続いていくと思っていた。

あの日。

黒い影に取り込まれる村人たちを、私はただ見ていることしかできなかった。

悲鳴。嘆き。悲しみ。恐怖。絶望。静けさ。

どうしても、私には彼らを傷つけることができなかった。

分かってしまったからだ。彼らは。彼らも。

どっちつかずの私は、結局、誰も守れなかった。そして村は。

そのとき、白い閃光が闇を切り裂いた。

カナンさんだ。彼はわたしたちを取り囲んでいた黒い影を次々と切り伏せていく。

一瞬、なにかおかしな光景を垣間見てしまった気がするけれど、ともかく、これで助かるはずだ。わたしも、エルゼさんも。

「エルゼさん、もう大丈夫だよ。カナンさんが来てく」

「やめて!!」

それは悲鳴だった。

エルゼさんは青ざめた表情で影たちの消えたあとを見つめている。

けれど、カナンさんは止まらない。エルゼさんの背にはりついた影を切り落とし、蠢く影たちのすべてを切り裂いた。

最後の黒い影が消えたとき、周囲の風景も元に戻った。……いや、少し違うところもあった。

煌々と燃えていた炎など最初からなかったかのよう。村人など最初からいなかったかのよう。

すっかり寂れて、ひとけのなくなった村を青い月が見下ろしている。

わたしとエルゼさんは、村の中心にある池の陸地に座り込んでいた。

「やっぱり、私はまた守れなかった。みんな去って行ってしまおう。誰一人、助けられない」

うわごとのように、エルゼさんはそう繰り返す。

いつの間に背後に立っていたのか、アキちゃんはわたしを見下ろしたあと、そっとエルゼさんの隣に片膝をついて、彼女に声をかけた。

「あなたは、精霊族だな。それも、とても古い」

うるんな目で、エルゼさんはアキちゃんを一瞥した。

「どうして分かるの？」

「身体が透けてる。本来肉体をもたない存在の証だろう」
本当だ。

エルゼさんの身体の感触はあるのに、地面が透けて見えている。

「次に、古い精霊というのは、力が強い。小規模とはいえ手の込み入った茶番を演じられるのは力のある証拠だろう」

アキちゃんの手を聞いて、エルゼさんは諦めたように遠くを見た。

「そうよ。私は、この村にたったひとり残された。みんないなくなってしまった。黒い影に襲われて、たくさんの子らが消えてしまったわ。生き残った子たちも、みんな遠くにいつてしまった」

言葉を一度切って、エルゼさんはわたしたちに向かって頭を下げ

た。

「ごめんなさい。また、昔みたいにお祭りがしたくて、ひとりで村人たちの姿を模して遊んでいたら、あなたたちが現れて……寂しかったの。だから、少しでも長く、いてほしくて。ごめんなさい。危険な目にあわせるつもりはなかったの」

やっとわかった。

カナンさんが、わたしたちを助けてくれる前に、ほんの少しだけ垣間見えた風景。

あれって、きっと、村に幸せがあふれていたころの姿なんじゃないだろうか。

「はた迷惑だな」

「アキちゃん！」

「俺は事実を言ってるだけだ。あんたのおかげで、俺たちは酷い目にあった」

相変わらず、アキちゃんは容赦がない。

結局、みんな無事だったのだからいいのに。

わたしが口を挟む前に、アキちゃんは、思ったよりもいたわりを込めた目でエルゼさんを見つめた。

「だが、あんたはリンを守ってくれた。そこは感謝してる」

「……私は、守れたの？」

「でなきや、このバカは、こんな能天気になんて笑ってねーよ」

うんうん、そのとおりだ。能天気はよけいだけ！

けど、誰もいない村で、ずっとエルゼさんはひとりで過ごしているのだろうか。これからも。

それは考えるだけで、とても寂しいことに思えた。

「ねえ、エルゼさん。よかったら、わたしたちと一緒に旅をしようよ」

だから、わたしはエルゼさんの両手を握って、思いつくままに言葉を重ねた。

「王都にね、いくんだけど、きつと楽しいよ。村のひともあるかも

しれない。ね。ここでひとりであるより、ずっといいよ」

ぽかんとした表情を浮かべて、エルゼさんはわたしとアキちゃんを交互に見比べた。

まるで、そんなこと思いもつかなかったとでも言いたげな様子だ。「精霊族は鉱石などを好んで棲家に行っているわけだが、あんたはなにに宿ってるんだ？」

「……これ」

エルゼさんが指差したのは、祈りを捧げる乙女の石像だった。

乙女の両目にはめられている石がエルゼさんの今の棲家らしい。

石像によりかかっていたカナンさんは、石像を検分してつぶやいた。「うーん。これはちょっと、持ち運びできないねえ。石像の目をえぐりだすのも忍びないね」

たしかに。見た感じ、石像は年代物のようだし、芸術品を壊すのは気が引ける。

「棲家って簡単に換えられるの？」

「簡単ってわけではないけど、不可能ではないだろうね」

カナンさんの返答を信じて、わたしはなにか他にエルゼさんが棲家にできそうなものがあるかどうか考えてみた。

「アキちゃんの首飾りはどうかな。綺麗な石だし」

「は？」

「王都についたら、もっと別のすてきな棲家を探すとして、当面はあれで我慢！どうですか！」

「うん。連れて行ってくれるだけで、うれしい」

「おい。俺の意見を聞く気はなしか」

「異論あるの？」

アキちゃんは押し黙った。

他に手がないのだし、これが現状ベストな選択だと思っ。

気がつくと、東の空がわずかに白みはじめていた。いつの間に、こんなに時間が経ってしまったていたんだろう。

そう意識すると、なんだか急に眠気が襲ってきた。うとうとと

していると、半透明なエルゼさんがわたしの傍によりそって、優しく髪を撫でてくれたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9153o/>

夜明けの魔術師

2011年11月20日03時17分発行